

## いじめ事象に関わる子どもの心理状態に関する基礎的研究

天理市教育委員会・千原雅代（天理大学）

学校現場では、いじめの早期発見が喫緊課題となっているが、子どもたちの何をもっていじめ被害を発見していけばよいのかを早急に明らかにする必要がある。これまで臨床心理学的な観点からは、自尊感情が取り上げられることが多かったが、事例研究から示唆されるのは、いじめ被害による PTSD 症状である。PTSD は定義からして、大きな事件を体験・目撃等したあとに生じる心的外傷ストレス反応と定義されているため、関係性いじめといった激烈な外傷体験がない場合には、適用されない。しかし、子どもたちの心が柔らかな思春期までは、関係性いじめも激烈な外傷体験となることがある。

そこで本研究では、天理市教育委員会と共同で、小5～中3の全員に PTSD および自尊感情の質問を行い、悉皆調査を行った。またその結果を、市が実施しているいじめ調査と連動させ、いじめ被害群、加害群、中立群それぞれの子どもたちの自尊感情および PTSD 症候について検討した。

また、平素の臨床体験から、ASD の子どもがいじめ被害にあう確率が高いと考え、いじめ加害・被害と DSM5 の神経発達症群、特に ASD（自閉症スペクトラム障害）との関連を検討した。具体的には、ASD 群、その他発達症群（ADHD 群、LD 群、知的発達症群等）、定型発達群の3群に分け、それぞれの群において、いじめ被害、加害、中立の子どもたちがどのくらいの割合で存在するかを母比率から検討した。調査対象となったのは小学生（976人）、中学（1124人）であり、東京都自尊尺度と PTSD を測る CPSS（child PTSD symptom scale）を実施、ハイリスク群を抽出、クラスごとにフィードバックした。

分析の結果、明らかになったのは以下の3点である。①小学生では、いじめ被害群は、自尊感情が優位に低く PTSD は「学校生活安定」尺度以外のすべての下位尺度において優位に高得点であり、自尊感情低下および PTSD 傾向がみられた。②中学生では、いじめ被害群は、PTSD の下位尺度13のうち9つの尺度（侵入、回避、過覚醒、安心感・信頼感の喪失、感情調節障害・ストレス耐性の低下、感情の麻痺、多動・注意集中困難、身体症状、対人恐怖心性）で優位に高かったが、自尊感情においては差がなかった。③ASD 群においては、いじめ被害にあった割合は15.8%と、他群と比較して、優位に高かった。また加害、中立の比率には有意差が見られなかった。

以上の結果から、いじめ被害児童生徒の発見のためには、自尊感情のみならず、特に中学生においては、PTSD 傾向に留意する必要があることが示唆された。自尊感情は中学生になると多様化することが先行研究においても指摘されており、本研究尾結果はそれに一致するものだった。

また、ASD の子どもたちは、いじめ被害にあいやすいことも明らかとなった。ASD の子どもたちは、雰囲気を読むのが苦手なことが多く、特に自我形成上、情緒不安定になる前思春期から思春期にかけては集団内で人間関係上のトラブルが生じることもあり、いじめ被害ハイリスク群として留意する必要があると考えられる。また ADHD はいじめ被害群にもなるが加害群にもなる可能性が示唆され、その点にも留意して子どもたちを見守っていく必要があることが示唆された。

\*本研究は天理大学学術研究資金を頂き、実施したことを申し添えます。